

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN 2015年5月号

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊27年目
創刊1989年 Nr.311



Egon Schiele (1890-1918) Wally 1912 Gouache, Bleistift auf papier 29.7 x 26 cm
Land Niederösterreich, Landessammlungen Niederösterreich Foto: Christoph Fuchs

Leopold Museum WALLY NEUZIL Ihr Leben mit EGON SCHIELE 27.02. - 01.06.2015
レオポルト美術館で6月1日まで開催の「ヴァリー・ノイツィル エゴン・シーレとの人生」展より

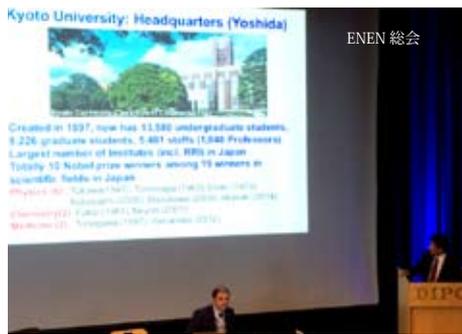


杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 44



福島原子力発電所事故を踏まえ、安全を中心とする原子力分野における欧州と我が国の学生交流の増進と人的ネットワークの強化に寄与することを目的とした「福島原子力発電所事故後の原子力に関する教育と訓練における欧州・日本交換プログラム」が四月から発効した。欧州は代表の欧州原子力教育ネットワーク連合(ENEN)、仏原子力科学技術機構(CEA)、ベルギー国立原子力研究センターの四機関、我が国は代表の東京工業大学、福井大学、日本原子力研究開発機構と京都大学の四機関が参加している。約五ヶ月留学する両国の修士学生に対して奨学金が日欧政府より支給される。三年間で計二十名の学生を日欧双方から派遣する。派遣先で研究指導を受けるとともに、異文化についても学ぶ機会が与えられる。

協定の実施に関する打合せが三月五〜七日にENEN総会に合わせてへ



ルンギで開催された。欧州からは七機関から九名、日本からは四機関から六名が出席した。京大からは原子炉実験所の斎藤教授と筆者が出席し、総会では、入京大を紹介した。今後京大工学研究科及びエネルギー科学研究科の学生が二年間で計六名程度欧州に派遣され、欧州の学生を三年間で計六名程度を受入れる。早速四月からローマ大学サピエンツァ校の学生を筆者の研究室で受け入れ、福島原子力発電所事故の解析を実施している。エネルギー科学研究科と協力講座を持つ原子炉実験所には、スロベニアのジョセフ・シユテファン研究所の学生が齊藤研に五月より所属し、原子炉熱流動のための気液二相流計測技術に関する研究を実施する。我が国の学生の派遣は十月からであるが、国際的な人材育成の強化に本協定が貢献することを大いに期待したい。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の桜について述べてみたい。一九九六年のオーストリア建国千年祭を祝して我が国からウィーン市へ千本の桜が寄贈された。桜の多くは国連シティー近くの広大なドナウ公園に植えられた。公園内にはこのことが日

独語で書かれた記念碑があり、桜は日本とオーストリアの友好の証となっている。また、イェドレセア橋近くのドナウ川中州には、我が国が寄贈した桜の最後の百五十本を配した「桜の森」がウィーン森林局と芸術家グループによって創られた。桜の森の完成と千本桜が全て植え終わった記念として、二〇〇二年春に最初の「桜の森祭り」が開催され、その後毎年桜



の季節に開催されている。

一方、京都は昔から桜の名所に恵まれている。秀吉が愛した多彩な桜を堪能できる醍醐寺、斎藤千本桜で有名な上賀茂神社、市内一遅咲きの御室桜が楽しめる仁和寺、池泉迴遊式庭園の八重桜が見事な梅宮大社、桜の園や清流園の里桜が美しい二条城、ライトアップされた夜桜が艶めかしい祇園白川、大きなしだれ桜で有名な丸山公園、紅しだれ桜が美しい平安神宮、高瀬川沿いにウメイヨシノの並木が続く木屋町通り、花びらの舞う桜のトンネルがロマンチックな哲学の道、約千五百本の桜と緑を渡月橋から見渡せる嵐山など、主なものだけでも枚挙にいとまがない。京都の桜は国内外から多くの観光客を集め、紅葉の秋に次いで二年で第二のピークを形成している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、桜の森は見る機会がなかったものの、職場が近いこともありドナウ公園の桜はよく見た。京都では学生時代も今も春は名所の桜を楽しんでいる。両市の桜を紹介できた幸運に感謝しつつ、ドナウ公園の桜の写真を掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■